



試合前、選手に感謝を伝えたいと語った小形弘さん(右)と、岩尾碩さん(左)。

悲願の切符

彼らの夏、私たちの夏。①

宿

願だった。」

そう話すのは東京都に住む小形弘さん。野球部創立3年目の主将を務めた。多くの人が応援に駆けつけたあの日、試合前にインタビューをしていたら、偶然お会いした。「当時は、物資が少なく、ボールの調達にも苦労した。」と、当時を振り返る。これから戦う後輩たちに、今一番伝えたいことを尋ねると、「もう感謝だけだ。よくぞ、よくぞ出場してくれた。先輩が本当に喜んでいてるぞ!」とても力強く、何よりもうれしそうに話した。「思う存分、戦ってきてほしい。」

居合わせた岩尾さん(同じく東京都・元野球部)とともに、ただ、感謝の想いが真っ直ぐに伝わってきた。市内でも、甲子園球場でも、同様の声が多く聞かれた。大勢の卒業生、特に元野球部員にとって、甲子園出場は悲願だった。出場した「彼ら」とは異なるが、何にも変えられない喜びがあつたに違いない。あまりにも時間がかかったが、ついにこの日を迎えられる。杵築高校を応援する1塁側アルプススタンド。他のチーム

ではあまり見られない、選手たちへの無上の感謝が声援に重なっていた。

そ

の応援席。「一発かましてやれ!」とひと際声を張り上げる人の姿。

10年前の大会決勝戦で惜敗……。悲願達成の一步手前まで迫った選手たちだ。

今年の決勝戦、甲子園とも、当時のメンバーの多くが駆けつけたという。想い入れの大きさは想像に難くない。

甲子園で、懸命に声援を送り、見守った「彼ら」は何を思うのだろうか。応援に駆けつけた二人に話を聞いた。

「10年前の」決勝戦でも、異様な雰囲気を感じた。甲子園は、それ以上の重圧だったろう。よく戦っていたと思う。」と河野さん。選手を労いながら、当時と今を振り返った。

「甲子園にも応援に行つて感じることは、やっぱりあの時に勝たなかった。」

荷宮さんは、自分たちが逃げられなかった寂しさ、自分たちを超えてくれたうれしさがあると、素直な気持ちを打ち明けてくれた。

甲子園に立った「彼ら」に対しては、「相手が常連校で、どこか遠慮していたのかもしれ



甲子園出場に沸いた、杵築市の夏。

いや、「杵築」の夏と言った方がよいだろうか。

杵築高校開校115年、野球部創立65年目。

あまりにも遠かった甲子園への切符を手にした彼ら……

私たちにとって「彼ら」とは、悲願を達成してくれた後輩であり、

小さな頃から知っている近所の子どもでもあり、

友人、先輩、子どもの同級生など様々な存在だ。

一つのチームへの応援に、異なる立場、世代のあふれる想い。

「甲子園」がくれた夏。「彼ら」と「杵築」にとって忘れられない夏。



10年前、ともに大分大会に挑んだ、荷宮大輔さん(右)と、河野雄介さん(左)。甲子園には、多くの応援メッセージも届いた。